93　世の中は　常にもがもな　渚こぐ　あまの小舟の　綱手かなしも

源実朝

〈声に出してよんでみよう〉

ヨノナカハ　ツネニモガモナ

ナギサコグ　アマノオブネノ　ツナデカナシモ



小舟

＊語頭以外のハ行の文字、つまり語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、ワ行音「ワ・イ・ウ・エ・オ」でよみます。[1]　助詞の「は」も、現代語と同様、「ワ」とよみます。

＊ワ行オ段の「**を／ヲ**」は、古語では［wo］と発音し、助詞以外の一般の語にも用いられていました。11世紀初め頃、ア行オ段の「**お／オ**」が［o］から［wo］に変化したため両者の発音の区別が失われ、さらに17～18世紀頃、両者ともに［o］と発音されるようになり、現在に至っています。

〈どんな意味だろう〉

世の中は、常に変わらずにあればよいのになあ…！

渚を漕ぐ漁師の小舟の綱手が、しみじみと胸にしみて哀しい…！

＊「常」は、「**無常**」の反対。平安時代末期から中世にかけての戦乱の世は、人々の心に、深い無常観を植えつけました。無常観を主要なテーマとした文学作品には、軍記物語の**『平家物語』**、随筆文学の**『方丈記』『徒然草』**などがあります。[2]

＊「もがも」は、願望を表す終助詞です。

＊第２句「常にもがもな」の最後の「な」は、詠嘆を表す終助詞で、ここが文末になります。このような歌の構造を「**２句切れ**」と言います。２句切れの歌のリズムは、「５・７」「５・７・７」となりますね。つまり、これは「５・７」のリズムを基本とする「**五七調**」の歌であるということになります。五七調は、現存する最古の歌集である**『万葉集』**（奈良時代・８世紀頃成立）の基本のリズムです。作者の源実朝は、『万葉集』の「**ますらをぶり**」と呼ばれる力強い歌の響きを愛し、自らも万葉調の歌を多く作りました。第五句末の「かなしも」の「も」も、『万葉集』の時代によく用いられた、詠嘆を表す終助詞です。[3]

〈解説〉

この歌には、人生の深い哀しみがたたえられています。鎌倉幕府の将軍として[4]、絶大な権力を握り、何一つ思いのままにならないものはないかのような地位にあっても、この世の無常は、おしとどめようがないのです。大海に、小さな舟で漕ぎ出してゆく海人の命は、一本の引綱に委ねられています。身分の上下・貴賤を問わず、無常を逃れるすべはないのです。人生を達観したような、深い味わいのこもる一首です。



岸辺の小舟

〈作者と出典〉

作者の**源実朝**（1192－1219）は、鎌倉幕府の第３代将軍。父は、初代将軍の源頼朝、母は、北条政子。兄は、２代将軍の頼家です。実朝は、京都の貴族文化に憧れ、和歌を藤原定家に学びました。家集（個人の和歌集）に、『**金槐和歌集**』があります。

実朝の歌としては、次のようなものも有名です。

大海の　磯もとどろに　寄する波　割れて砕けて　裂けて散るかも

（大海の磯もとどろくほどに寄せる波は、岩に当たって、割れて砕けて散るのだなあ！）

箱根路を　わが越え来ば　伊豆の海や　沖の小島に　波の寄る見ゆ

（箱根の山道を越えて来ると、眼下に広がる伊豆の海よ。沖の小島に波がうち寄せているのが見える）

物言はぬ　四方の　獣　すらだにも　あはれなるかな　親の子を思ふ

（物言わぬあちこちの動物さえも、しみじみと感動的だなあ、親が子を思っているよ）

時により　過ぐれば民の　嘆きなり　八大竜王　雨やめ給へ

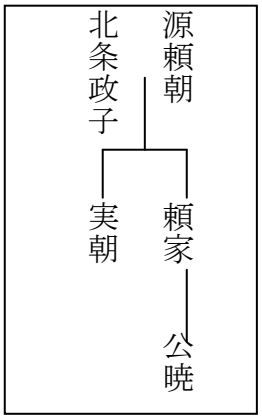
（雨は必要不可欠と言っても、時によって降り過ぎれば民の嘆きとなります。八大竜王よ、どうか、雨を降らすのをおやめください）

山は裂け　海はあせなむ　世なりとも　君に二心　わがあらめやも

（山が裂け、海が干上がってしまうような世がたとえ来ようとも、君主に対して謀反の心を私が持つはずがありません）

実朝は、鎌倉の鶴岡八幡宮に参詣の際、頼家の息子の公暁に暗殺されました。公暁は、父・頼家の非業の死の原因が実朝にあると思い込んでいたのでした。実朝は、享年28歳でした。

実朝の死により、源氏の正系は絶え、鎌倉幕府の将軍は京都から幼い親王や摂関家の子弟を迎えた名ばかりのものとなり、執権の



源実朝人物関係図

北条氏が政　の実権を握るようになります。このような鎌倉の　乱に　じ、政権を　び京都の朝　に　り　そうとしたのが、**後**（　「99 人も　し」）による**の乱**（1221 年）ですが、これは、失　に終わりました。

　実朝の万葉調の歌は、　　時代、　　らの　学者によって、大いにたたえられました。この「世の中は」の歌の出典は、　　の　**和歌集**（　　の命　で　集された和歌集）である「　　和歌集」です。



---

1 ハ行の子音は、8 世紀頃 [p] から [ɸ]（現代語の「　」の子音）に変化し、やがて 11 世紀頃、　後を母音にはさまれた語中・語尾の [ɸ] が [w] と発音されるようになりました。なお、[ɸ] が [h]（現代語の「ハ・　・　」の子音）に変化したのは、17 世紀頃と　定されています。

2 『平家物語』は、平安時代末期の源氏と平家の　乱を　とした軍記物語で、　師によって語られました。作者も、成立年代も不　です。『方丈記』は、作者は　。鎌倉時代　期、1212 年の成立です。『徒然草』は、作者は　。鎌倉時代末期の、1331 年頃の成立です。

3 『万葉集』の基本のリズムの「五七調」に対し、「7・5」を基本とするリズムを「**七五調**」と言います。七五調は、『**古　和歌集**』（平安時代　期・905 年頃成立）の時代以降現代に至るまで、　本語の　文の一般的なリズムとなっています。また、『万葉集』の「ますらをぶり」とは、力強く　しい　的な歌　を言います。これに対し、『古　和歌集』以降の　でか　い　的な歌　を「**たをやめぶり**」と言います。

4 　家による政府を「幕府」、その　の人物を「将軍」と言います。鎌倉時代は、それまでの朝　に代わって　家が政権を握った、　期的な時代でした。